

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

加藤恵梨著『感情を表す形容詞の意味分析』

本書は、「おもしろい」「かなしい」「くるしい」などの感情を表す形容詞の意味分析を行った書である。フレーム、比喩（メタファー、メトニミー、シネクドキー）といった認知言語学の基本的概念を用いつつ形容詞 22 語を分析している。「おそろしい」「つらい」などの形容詞が持つ多義性を明示化するだけでなく、「さびしい」と「わびしい」や、「じれったい」と「もどかしい」の類似点と相違点を示すなど個々の意味の関係性にも注目している。

本書は全 10 章からなる。構成は以下の通り。「第 1 章 語の研究の必要性」「第 2 章 感情と感情形容詞」「第 3 章 フレームと比喩」「第 4 章 〈喜〉の感情を表す形容詞」「第 5 章 〈哀〉の感情を表す形容詞」「第 6 章 〈怖〉の感情を表す形容詞」「第 7 章 〈厭〉の感情を表す形容詞」「第 8 章 〈昂〉の感情を表す形容詞」「第 9 章 反義語の意味分析」「第 10 章 おわりに」。末尾に「引用文献」「付記」「謝辞」を付す。なお本書は『人文科学の一流的研究を目指す博士論文叢書』の第 12 巻として刊行された。(竹村明日香)
(2023 年 10 月 23 日発行 日中言語文化出版社刊 A5 判横組み 142 頁 定価 2,200 円 ISBN 978-4-905 013-23-5)

水野的著『日本人は英語をどう訳してきたか——訳し上げと順送りの史的研究——』

幕末・明治から現代まで、英語から日本語への訳読には「訳し上げ」と「順送りの訳」という二つの規範が対立してきた。本書では、支配的規範であった「訳し上げ」に対して「順送りの訳」がどのように対抗規範を作り上げてきたのかを明らかにしつつ、「順送りの訳」の方が訳読の手法としてのみならず翻訳全般の手法としても優れていることを論理的に裏付けている。800 点を超える膨大な英語翻訳研究書・手引き書を分析した労作であり、元日本通訳翻訳学会会長による遺著である。

本書の構成は以下の通り。「まえがき」「第一章 翻訳調をめぐる——柳父章と山岡洋一が遺したもの——」「第二章 順送りの訳と情報構造」に続く「第三章 英語訳読史の展開——訳し上げと順送りの訳の系譜——」では、節を「Ⅰ. 前史」「Ⅱ. 初期の英語の訳読法——幕末から明治末まで——」「Ⅲ. 大正時代の訳読法」「Ⅳ. 昭和前半（戦前）の訳読法」「Ⅴ. 昭和後半（戦後）から現在までの訳読法」に分けて詳説する。「第四章 翻訳者・通訳者たちの順送りの訳」でも節を「Ⅰ. 翻訳者たちの順送りの訳」「Ⅱ. 通訳者たちの順送りの訳」に分けて紹介する。「第五章 訳読の方法と課題——ミル『自由論』の翻訳を例に——」の後、「あとがき」「文献」「人名索引」「事項索引」を付す。(竹村明日香)

(2024 年 3 月 29 日発行 法政大学出版局刊 A5 判横組み 662 頁 定価 5,170 円 ISBN 978-4-588-4450 6-4)

張磊・呉美富著『《新撰字鏡》校注』上冊・下冊

平安期に編纂された『新撰字鏡』は、成立後も長年にわたって筆写が繰り返されてきたため、本文には多くの誤記・誤写が見られる。序文にも錯誤が多く、こうした事情からも本書には校注が不可欠であると言える。これまで『新撰字鏡』は国内外の研究者によって整理・研究が進められてきたが、学術的に広く活用できるような全巻にわたる校注付き本文は刊行されてこなかった。本書はそれにこたえるべく『新撰字鏡』全体にわたる校訂と注釈を試みたものである。「(一) 字形」, 「(二) 訓釋」, 「(三) 注音」, 「(四) 引書」の四つの観点から校注が行われている。

本書の構成は以下の通り。「前言」「凡例」「新撰字鏡篇立次第」「新撰字鏡序」に続き、「新撰字鏡卷第一」から「新撰字鏡卷第十二」に至るまでの各巻における本文と校注を記す。最後に「参考文献」と「部首檢字表」「後記」を付す。(竹村明日香)

(2024 年 4 月発行 浙江大学出版社刊 B5 判横組み 上冊 493 頁・下冊 759 頁 定価 16,500 円 ISBN 978-7-308-24882-2)

茅桂英著『ビジネス日本語における依頼表現』

ビジネス日本語における依頼表現を、主に書き言葉と話し言葉の両観点から考察した書である。社内文書と社外文書における依頼表現の使用実態や、昭和から現代に至るまでのビジネス小説における依頼表現の変遷、中国におけるビジネス日本語教育のありようなど、様々な観点から分析が行われている。

本書は全 5 部 10 章からなる。「序章」に続く「第一部 ビジネス場面における現代書き言葉の依頼表現の使用実態」には、「第 1 章 ビジネス文書マニュアル本における依頼表現」「第 2 章 ビジネス場面における依頼表現——銀行ホームページの「お知らせ」を調査対象として——」を収める。「第二部 ビジネス小説における依頼表現の使用実態・変遷」には、「第 3 章 昭和後期のビジネス小説における依頼表現」「第 4 章 平成以降のビジネス小説における依頼表現について」「第 5 章 「てください」の使用状況の変遷について——ビジネス小説を調査対象として——」を収める。「第三部 上下関係・ジェンダーの依頼表現に及ぼす影響」には、「第 6 章 ビジネスドラマにおける依頼表現——上下関係・話し手の性別・聞き手の性別による影響——」を収める。「第四部 「くださる」系・「いただく」系・「いただける」系の実際の使用状況」には、「第 7 章 ビジネス場面における依頼表現について——企業で実際に用いられているメールを調査対象として——」, 「第 8 章 「くださる」「いただく」「いただける」「賜る」について」「第 9 章 ビジネス場面における依頼表現——中国語母語話者と日本語母語話者とを比較して——」を収める。「第五部 中国におけるビジネス日本語教育の

あり方及び提案」には、「第10章 中国のビジネス日本語会話教科書における依頼表現」「終章」を収める。最後に「参考文献」と「謝辞」を付す。(竹村明日香)

(2024年10月29日発行 郵研社刊 A5判横組み 232頁 定価4,400円 ISBN 978-4-907126-70-4)

岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也著『レキシコン研究の新視点——統語・語用と語の意味の関わり——』

近年のレキシコン研究では、語彙の意味分析にとどまらず、統語や語用との関係を視野に入れた探求が行われている。本書では「語彙の情報とは何か」というレキシコン研究の根本的な問いに答えることを目指して、レキシコンと統語論・意味論・語用論との関連性や相互作用について考察した論考を収める。概念意味論、生成語彙論、分散形態論、形式意味論などの理論的枠組みのほか、実験や定量的分析による複合語・派生語の形成、構文交替、受動や使役、モダリティ、指示詞、取り立て詞、異形態、多義性、通時的意味変化などを扱っている。

本書は全3部14章からなる。「まえがき」に続き、「第Ⅰ部 語の意味と文の構造」には、「第1章 意味合成の領域とレキシコンからシンタクスへの写像(工藤和也)」「第2章 「場所格交替」再訪——多義性と強制に基づく項交替——(岸本秀樹)」「第3章 韓国語における受動文の派生と二重使役の衰退について(青柳宏)」「第4章 「ではないか」構文における節構造と上方再分析(森山俊成)」「第5章 とりたて詞の焦点拡張と多重生起——複文における対比のハを中心に——(佐野まさき(真樹))」を収める。「第Ⅱ部 語用論的意味をめぐる」には、「第6章 日本語の指示詞の意味と語用論——ソ系指示詞の直示用法を中心に——(澤田淳)」「第7章 「普通に」における語用論的意味——客観化・対人化——(日高俊夫)」「第8章 「Vすることを始める」の持つ「習慣性」——統計モデリングを用いた容認度判断の検証——(山田彬亮)」「第9章 テシマウは本当に完了のアスペクト形式なのか(中谷健太郎)」を収める。「第Ⅲ部 語や形態素の意味・構造・機能」には、「第10章 ダケの語彙の意味——度数の意味から排他性へ——(富岡諭)」「第11章 動詞「掘る」の多義性について(澁谷みどり)」「第12章 5種類の接辞「っこ」の意味と機能(木戸康人)」「第13章 分散形態論と語彙的V-V複合語の意味構成(田中秀治)」「第14章 日本語数表現に見る異形態(依田悠介)」を収める。最後に「執筆者紹介」を付す。(竹村明日香)

(2024年10月29日発行 開拓社刊 A5判横組み 356頁 定価5,280円 ISBN 978-4-7589-2406-1)

栞竹民著『中国語との比較による日本語の漢語の意味史的研究』

本書は、漢語の意味変化について、中国語との比較を基軸として、日中両国の文献を時代別、ジャンル別に精査して類別し、意味変化の要因を分析、考究したものである。とりわけ、漢語の意味変化をいくつかの組に類型化し、漢語同士を関連づけて漢語語彙の体系化の方向性を提示している点に特色がある。こうした各型に属する語として二十

数語の漢語を例示した上で、考察が行われている。

本書の構成は以下のとおり。「序文（小林芳規）」「凡例」に続いて「序章 日本語における漢語の意味変化研究の意義、構想及び方法」において漢語の意味変化研究における種々の論点を提示する。「第一章 意味の幅の変化」では漢語の意味の適用範囲に関する問題を扱い、「第一節 意味の拡大化」では「気色」「気分」「覚悟」「遠慮」「迷惑」,「第二節 意味の縮小化」では「料理」「病気」「和平」「平和」,「第三節 意味の一般化」では「言語道断」「譏（機）嫌」を取り上げている。「第二章 意味の価値の変化」では漢語の評価的な意味に関する問題を扱い、「第一節 意味の下落」では「張本」「謳歌」「濫吹」,「第二節 意味の向上」では「馳走」「結構」を取り上げている。「第三章 意味の転用」では分野の域を超えて起こる意味変化の問題を扱い、「成敗」「心神」を取り上げている。「第四章 形態による意味変化」では形態の関連性によって生じる漢語の意味変化に関する問題を扱い、「第一節 音韻による意味変化」では「心地」「気分」「神心」「元（減・験）気」,「第二節 音よみと訓よみによる意味変化」では「仰天」「以外」,「第三節 語法による意味変化」では「随分」,「第四節 用字による意味変化」では「民烟」「老若」「芸道」を取り上げている。「終章 論旨の帰結と今後の課題」を配した後、末尾に「後記」「索引（事項・語彙・書名・人名）」を付す。（川島拓馬）

（2024年10月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 808頁 定価16,500円 ISBN 978-4-7576-1105-4）

沖森卓也編著『日本語ライブラリー 奈良時代の日本語』

本書は、奈良時代（およそ8世紀以前）の日本語について、文字表記・音韻・語彙・文法の観点からわかりやすく解説した書である。

本書は全5章からなる。「第一章 概説（沖森卓也）」では、節を「一. 日本語の背景」「二. 文字の伝来」「三. 上代語の範囲と資料」「四. 上代語の特徴」「五. 言葉についての意識」「六. 方言」に分けて、上代語の諸特徴について述べる。「第二章 文字・表記、文章文体（澤崎文）」では、「一. 漢字の伝来」「二. 日本語を漢字で表す」「三. 万葉仮名」「四. 上代の文章文体」に節を分け、どのように漢字を用いて日本語を書き表すようになったのかを出土品（木簡など）の例も挙げつつ解説する。「第三章 音韻（鈴木豊）」では、「一. 研究方法と資料」「二. 上代特殊仮名遣い」「三. 奈良時代の日本語の母音体系」「四. 子音の音価と音節構造」「五. 奈良時代のアクセント」に節を分け、研究者ごとの音韻解釈などが簡潔にまとめられている。「第四章 語彙（沖森卓也）」では、「一. 語の認定」「二. 上代語の語彙量と語種」「三. 和語の構造と生成」「四. 名詞の語彙」「五. 動詞の語彙」「六. 形容詞・副詞の語彙」「七. 語形と意味」「八. さまざまな語彙」「九. 漢語」「一〇. さまざまな位相」に節を分け、様々な品詞の語彙の他に親族語彙や擬声語擬態語、忌語なども取り上げる。「第五章 文法（森野崇）」では、「一. 動詞」「二. 形容詞」「三. 助動詞」「四. 助詞」「五. ク語法」「六. 敬語」に節を分けて、上代語

の文法について解説する。末尾に「索引」を付す。(竹村明日香)

(2024 年 11 月 1 日発行 朝倉書店刊 A5 判縦組み 168 頁 定価 3,190 円 ISBN 978-4-254-51692-0)

沖森卓也著『日本漢字全史』

本書は、中国で生み出された漢字が日本語に受容され、日本語や日本文化に大きな影響を及ぼした歴史について、言語の側面のみならず、日本の文化や人々との関わりを通して描いたものである。漢字の日本への伝来について述べた後、日本語での漢字の諸相を、上代・中古・中世・近世・近代という時代区分に沿って記述している。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続いて「第一章 伝来——五世紀まで——」「第二章 受容——六～八世紀——」「第三章 定着——九～一二世紀——」「第四章 伸長——一三～一六世紀——」「第五章 流通——一七世紀～一九世紀中頃——」「第六章 発展——一九世紀中頃以降——」。末尾に「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024 年 11 月 6 日発行 筑摩書房刊 新書判縦組み 384 頁 定価 1,320 円 ISBN 978-4-480-07660-1)

麻子軒著『無生物主語他動詞文の日中対照研究——大規模均衡コーパスと多変量解析を用いた新たなアプローチ——』

本書は、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の成立要因およびその相違を解明するものである。本書は、従来の研究に新たな視点と方法論を提供している点に特色がある。具体的には、名詞と動詞の組み合わせに着目し、連語論的アプローチを導入していること、また日中両言語の大規模コーパスを調査対象とし、対照される言語体系の原理を観察できるコレスポネンス分析などの多変量解析を取り入れていることが挙げられる。

本書は全 4 部 11 章からなる。「まえがき」に続き、「第一部 序論」には「第 1 章 研究の背景と概要」「第 2 章 先行研究」「第 3 章 調査の概要」を収める。「第二部 文レベルの成立要因」には「第 4 章 理論の枠組み」「第 5 章 対格名詞が物名詞の場合」「第 6 章 対格名詞が事名詞の場合」「第 7 章 対格名詞が人名詞の場合」「第 8 章 その他の構文に関して」を収める。「第三部 文章レベルの成立要因」には「第 9 章 文章レベルの要因の検討」「第 10 章 ロジスティック回帰分析による日中比較」を収める。「第四部 結論」には「第 11 章 結論」を収め、末尾に「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024 年 11 月 8 日発行 関西大学出版部刊 A5 判横組み 214 頁 定価 2,090 円 ISBN 978-4-87354-787-9)

松原幸子著『日本語学習から見た〈機能語〉の類の研究——日本語能力試験1級〈機能語〉の類の分類に基づいて——』

本書は、以前の日本語能力試験1級の出題基準に示されていた「機能語の類」に注目し、日本語学習の見地から考察を試みたものである。まず「機能語の類」の構造を単語という観点に基づいて整理・分類を行い、それらが実際の文の中でどのような文の部分を形成し、どのような文法的な意味をもって働いているのかを検討している。それによって「機能語の類」の文法的位置づけ、および日本語学習における意義の解明を目指している。

本書の構成は以下のとおり。「序章 はじめに」に続いて「Ⅰ 日本語能力試験1級〈機能語〉の類」の分類には「第1章 日本語能力試験1級〈機能語〉の類」の分類の文法的位置づけ」「第2章 日本語能力試験1級〈機能語〉の類」分類にあたっての本書の基本的立場」を収め、本書で扱う機能語の類を分類するにあたって必要となる諸概念に対して検討を行っている。「Ⅱ 品詞を中心として分類した日本語能力試験1級〈機能語〉の類」の検討には「第3章 品詞という観点で捉えるもの(1)——単語であるもの——」「第4章 品詞という観点で捉えるもの(2)——単語の部分であるもの——」「第5章 文の部分とのかかわりで捉えるもの」「第6章 品詞を中心として分類した日本語能力試験1級〈機能語〉の類」を収め、単語という観点で整理し、品詞を中心に分類を施した個別の機能語について分析を行っている。最後に「終章 日本語能力試験1級〈機能語〉の類」の文法的特徴と日本語学習における位置づけ」および付録資料として「『出題基準』に見える〈機能語〉の類」の表記と品詞を中心とした〈機能語〉の類の分類の対照表」を配した後、末尾に「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)
(2024年11月11日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 684頁 定価13,200円 ISBN 978-4-8234-1149-6)

由本陽子・杉岡洋子・伊藤たかね著『語の文法へのいざない』

本書は、教科書としても使える形態論の入門書を目指して企画されたものであり、技術的な問題には踏み込まず、日本語と英語の具体例を多く挙げながら語形成に関わる諸現象を解説している。語形成や語構造の分析には、文レベルの文法と共通して適用し得る一般化もあれば、形態論独自の原理・原則もある。文レベルの文法では必要とされない説明も重視するという趣旨が、本書タイトルの「語の文法」という表現に現れている。

本書は全2部13章からなる。「まえがき」に続いて、形態論の基本的な知識と、分析に用いる道具立てについての初歩的な知識を導入する第1部には「1章 語の文法とは」「2章 語とレキシコンの基本的性質」「3章 「語の文法」に有用な道具」を収める。次いで、日英語の様々な語形成の現象について具体的な分析を紹介する第2部には「4章 「名詞＋名詞」の複合名詞」「5章 名詞から動詞への転換」「6章 形容詞の性質と形容詞から作られる動詞」「7章 接辞付加の規則性と順序」「8章 接頭辞付加による派生

語の意味」「9章 複雑語の形成と項構造」「10章 英語の動詞由来の複合語」「11章 日本語の動詞由来の複合語」「12章 日本語の「動詞＋動詞」の複合」「13章 句が関わる語形成」を収める。加えて、3つのコラムを収録している。末尾に「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年11月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 312頁 定価2,860円 ISBN 978-4-8234-1259-2)

築島裕著『築島裕著作集 第七巻 典籍解題』

本著作集の第七巻は、典籍解題を集めたものである。解題を、仏教関係、国書・和歌・和文関係、契沖関係に分類した上で、おおよそ旧稿の発表順に掲載している。

本書の構成は以下の通り(旧字体は新字体に改めた)。「玄奘三蔵についての古文献」「叡山文庫藏息心抄について」「高山寺蔵本東域伝灯目錄書誌寸見」「高山寺本古往來の文献学的研究」「高山寺本表白集の研究」「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈」解題」「醍醐寺蔵本表白集について」「(解説)高山寺蔵本「真言系図」について」「六地藏寺蔵中世国語資料 解題」「六地藏寺蔵恵範上人資料 解題」「仁和寺蔵本『秘密血脈^{尊海新編}』解説」「随心院蔵本孟蘭盆經惣釈 解説」「仁和寺蔵本紺紙銀字法華經 解説」「大東急記念文庫蔵本太鏡百鍊鈔・太鏡底容鈔 解題」「大東急記念文庫蔵本幼学指南鈔 解題」「高山寺本江談抄の国語学的一考察」「西本願寺本万葉集 解説」「和漢朗詠集 解題」「石山寺蔵本石山寺十首和歌 解説」「石山寺蔵本源氏物語卷々和歌 解説」「契沖の語学——「和字正鑑鈔」の成立について——」「(解説)契沖述作の語学書について」「(解説)厚顔抄について」「(解説)(万葉代匠記)卷第十七の底本及び校合本について」「(解説)万葉代匠記卷第十八・十九の底本及び校合本について」「『契沖全集』諸本解説」。(竹村明日香)

(2024年11月15日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 538頁 定価16,500円 ISBN 978-4-7629-3627-2)

金敬玲著『近代中国語会話書の日中対照研究』

近代日本では日中貿易などでの実用を目的として中国語が学ばれるようになった。日本で初めて北京官話が教授された明治9(1876)年以降、数多くの中国語関係書が刊行されるようになる。本書では、明治9(1876)年から大正初期にかけて日本で刊行された中国語関係書(特に会話書)を調査対象とし、当時の中国語とその日本語訳の対照研究を行う。中国語の文法項目である「能願動詞」、「兼語文」、及び助詞の“了”がそれぞれどのような日本語に対応しているのかを明らかにするだけでなく、日中両言語で頻用される程度副詞や移動表現についての対照研究なども行う。

本書は全4部8章からなる。「序章 近代日本の中国語教育と中国語教育関連書籍」に続く第一部には、「第1章 『清語会話案内』における能願動詞」「第2章 『清語会話案内』における兼語文」「第3章 『清語会話案内』における“了”」を収める。第二部には、「第4章 明治期の中国語関係書における“会”」、第三部には「第5章 近代中

国語会話書における程度副詞の日中対照研究——明治後期を中心に——」「第6章 近代中国語関係書とその和訳書における程度表現」を収める。第四部には、「第7章 近代中国語会話書における主体移動表現の日中対照研究」「第8章 近代中国語会話書における客体移動表現の日中対照研究」「終章 近代中国語会話書の日中対照研究と今後の展望」を収める。なお本書は國學院大學博士論文出版助成金の交付を受けて刊行されたものである。(竹村明日香)

(2024年11月26日発行 郵研社刊 A5判横組み 202頁 定価4,400円 ISBN 978-4-907126-72-8)

青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究7』

隔年刊行の論文集『日本語文法史研究』の第7巻であり、研究論文9編、テーマ解説1編、名著紹介1編を収めている。

本書の構成は以下のとおり。「はしがき」に続いて「歴史的観点から見た「青い目をしている」構文(青木博史)」「名詞の脱範疇化についての一考察——ホドにおける副助詞への文法化——(竹内史郎)」「ナラバとナリトモの消長に見る仮定節史(矢島正浩)」「形容詞語幹動詞の自他対応関係の歴史(村山実和子)」「副詞「道理で」の成立(古田龍啓)」「古代語「む」の連体用法の意味について(古川大悟)」「中古語疑問文の記述法について——構成要素配列による体系把握——(高山善行)」「中世和化漢文「上者(ウヘハ)」の機能——「鎌倉幕府裁許状」からみる——(永澤済)」「近世・近代におけるノ有り疑問文使用の拡大(林淳子)」を収録する。「テーマ解説」として「副詞(川瀬卓)」、「文法史の名著」として「川端善明著『活用の研究』(小柳智一)」を収録する。末尾に「日本語文法史研究文献目録2022-2023」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年11月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 304頁 定価4,400円 ISBN 978-4-8234-1267-7)

田島優著『感謝表現の発想法と歴史』

上代から近現代に至るまでの「かたじけなし」「冥加ない」「ありがたい」などの感謝表現がどのような変遷を経て成立したのか、またそれらはどのような発想法から生じたものかを明らかにした書である。通時的にみて発想法の基盤には〈困惑・恐縮〉という話者の共通した意識があることなど、語形の変遷を追うだけにとどまらない指摘を行う。

本書は二部の構成からなる。「はじめに」に続き、「第一部 感謝表現の歴史」では「第一章 感謝表現研究の先覚者」にて感謝表現に言及した諸家の記述をまとめる。「第二章 上代・中古のカタジケナシ」では、宣命・平安朝物語における例を取り上げ、上代・中古でのカタジケナシとカシコシの相違や、それらの感謝表現が生じる発想法の根源について述べる。「第三章 中世の感謝表現」では、和漢混淆文や狂言のほか、方言の例も考慮に入れつつ、クワブン(過分)、モツタイナイ、デカシタなどの新たな感謝

表現やその予備軍が現れることを指摘する。「第四章 近世前期の感謝表現」では、アリガタイの登場を取り上げ、それまでの下から上への感謝表現に加えて上から下への感謝表現も生じて、使用が双方向的になったことを指摘する。「第五章 近世後期から近現代にかけての感謝表現」では、江戸でのアリガタイの浸透とオオキニの誕生、そして京都における感謝表現を取り上げる。ドウモが用いられていくようになる過程についても考察を加える。「第二部 「冥加」系感謝表現とその周辺」では、「第一章 ミヨウガナイ（冥加ない）をめぐって」にて、「ーナイ」は何を表しているのか、そしてミヨウガ（冥加＝神仏の加護）の「ナイ」ことがなぜ感謝表現へと移り変わっていくのかを中世・近世の用例と共に論証していく。「第二章 モットイナシ（勿体なし）について」では、中世のモットイナシとシャウダイナシ（正体なし）について取り上げる。「第三章 近世前期におけるミヨウガ（冥加）に関わる表現」「第四章 ミヨウリニツキル（冥利に尽きる）の意味変化」に続き、「付章 別れの挨拶表現の成立とシステム変化」ではサラバ、サヨウナラなどの別れの挨拶表現を取り上げる。「おわりに 感謝表現の歴史と方言の分布」の後、末尾に「参考文献」「本書の基盤となっている論考」「あとがき」を付す。（竹村明日香）

（2024年12月1日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 424頁 定価12,100円 ISBN 978-4-8386-0799-0）

二戸麻砂彦著『前田本色葉字類抄の音注研究——研究篇——』『同——資料編——』

前田本色葉字類抄の音注には、同音字注・反切・仮名音注の三種が見られる。本書では仮名音注を中心に取り上げている。前田本色葉字類抄の仮名音注は上巻で5,101例、下巻で4,758例を数える。研究篇ではその膨大な諸例について、日本の古辞書類や中国の中古音と対照させながら丁寧に検証を行う。資料篇では、掲出字の韻母別・声母別・声調別に分類した仮名音注一覧表を掲げる。

研究篇の構成は以下の通り。「1. 序説」「2. 前田本色葉字類抄の仮名音注」「3. 仮名音注の韻母別考察」「4. 仮名音注の声母別考察」「5. 前田本色葉字類抄の声調別考察」「6. まとめ」「7. 引用文献・参考文献」「あとがき」。

資料篇の構成は以下の通り。「前田本色葉字類抄の仮名音注／イロハ順一覧」「前田本色葉字類抄の仮名音注／韻母別一覧」「前田本色葉字類抄の仮名音注／声母別一覧」「前田本色葉字類抄／声調別一覧」。最後に「附篇」として、同音字注と反切の一覧表である「前田本色葉字類抄／同音字注一覧」と「前田本色葉字類抄／反切一覧」を付す。（竹村明日香）

（2024年12月19日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 1408頁〔研究篇〕 1212頁〔資料編〕 定価55,000円 ISBN 978-4-7629-3693-7〔研究篇〕 978-4-7629-3694-4〔資料編〕）

原田伊佐男著『埼玉県東南部方言辞典』

埼玉県東南部の大宮台地と東側の中川低地地域（川口市東部、草加市、八潮市周辺）の伝統的方言、とりわけ北足立郡旧安行村とその周辺の方言を収めた辞典である。当地出身の著者（1947年生まれ）が日常生活の中で見聞きした語彙・語法を収載する。減びつつある地域特有の俚言や民俗語彙に加えて、現在も使われている生活語彙や機能語（助詞・助動詞、接尾辞等）についても解説されている。特に格助詞については、構文との関連を踏まえて詳しい説明が加えられている。見出し語には音韻表記があり、アクセントも示されている。意味・用法の他に語誌・語源に配慮した説明も見られる。（竹村明日香）
（2024年12月25日発行 くろしお出版刊 B5判横組み 300頁 定価7,700円 ISBN 978-4-87424-986-4）

木部暢子編著、中澤光平・中西太郎・平子達也著『起源でたどる日本語表現事典』

「そら（空）」「ほくろ（黒子）」「こめ（米）」「さむい（寒）」などの日常で使用されている日本語がどのような歴史を経て今の形になったのかを文献に基づいて解説した事典である。古辞書や文学作品のみならず、方言資料もふんだんに使って説明している点に特色がある。名詞と形容詞を279項目立てて、それぞれの「用法」と「語の由来」を一般人にもわかりやすい形で記述している。

本書は2部構成からなる。「第Ⅰ部 ことばの歴史をさぐるための基礎知識」では、日本語の歴史を探究するために必要な知識として、日本語の音韻の歴史、音便や連濁などの形態音韻変化の諸例、本書で利用した調査資料の一覧が記されている。「第Ⅱ部 身近な日本語の起源」では、項目を以下の15グループに分けて解説を行う。「1. 自然」「2. 空間・時間」「3. 親族」「4. 人体」「5. 衣」「6. 食」「7. 住」「8. 道具」「9. 魚介類」「10. 動物」「11. 鳥」「12. 虫」「13. 植物」「14. 色彩」「15. 形容詞」。付録として「引用文献一覧（五十音順）」「引用文献一覧（年代順）」を末尾に付す。（竹村明日香）

（2024年12月25日発行 丸善出版刊 四六判横組み 322頁 定価4,400円 ISBN 978-4-621-31035-9）

村中淑子著『「ののしり」の助動詞でなにが表現されるのか——関西方言話者の表現の特質を求めて——』

本書は関西方言における「ののしり」表現について論じたものである。近世の洒落本や滑稽本、明治期以降の落語資料や小説資料をもとに、表現としての「ののしり」の価値の可能性、すなわち、コミュニケーションにおいて「ののしり」表現の果たす働きが追究されている。また、「ののしり」のことばを軸に東西の比較を行い、関西方言の表現の特徴を明らかにしている。

本書は全2部9章からなる。「まえがき」「序章 なぜ「ののしり」の助動詞なのか」に続いて、「Ⅰ 近世の京阪方言におけるののしりの助動詞」には「第1章 洒落本『異本郭中奇譚』——江戸板から上方板への書き換え——」「第2章 洒落本『月花余情』——上方板か

ら江戸板への書き換え——」「第3章 滑稽本『診 臍の宿替』および『穴さがし心の内そと』にみる「ののしり」」「第4章 近世まとめ——我々はどこまで来たか（その1）——」を収める。「II 近代・現代の京阪方言におけるののしりの助動詞」には「第5章 明治・大正期の大阪落語資料にみる「ののしり」」「第6章 20世紀前半（明治・大正・昭和）の上方落語にみる「ののしり」」「第7章 20世紀前半の小説資料——織田作之助『わが町』にみる「ののしり」——」「第8章 20世紀後半の落語の東西比較——六代目笑福亭松鶴の「らくだ」と六代目三遊亭圓生の「らくだ」——」「第9章 近代・現代まとめ——我々はどこまで来たか（その2）——」を収める。「終章 「ののしり」と「ことばの調整」」「補章 謎解きとして——ののしりを捉え直す——」を配した後、付録として六代目笑福亭松鶴「らくだ」と六代目三遊亭圓生「らくだ」の文字起こしを収録している。末尾に「索引」を付す。（川島拓馬）

（2024年12月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 280頁 定価7,700円 ISBN 978-4-8234-1255-4）

張明著『現代日本語の字音接辞——連体詞型字音接頭辞の記述的研究——』

本書は、現代日本語における字音接辞、特に「当委員会」の「当」、「本法律案」の「本」のような「連体詞型字音接頭辞」と呼ばれる一群について、その意味用法や造語機能、類似する意味表現との違いなどを体系的・包括的に論じたものである。はじめに字音接辞およびその研究に関する概要を述べた後、個々の接頭辞について詳細な記述が行われている。

本書は全2部16章からなる。「前書き（前田直子）」「序章 はじめに」に続いて、「第1部 現代日本語の字音接辞とその研究に関する概要」には「第1章 字音接辞の規定（内包的定義）」「第2章 字音接辞の分類（外延的定義）」「第3章 字音接辞の造語機能」を収める。「第2部 連体詞型字音接頭辞の記述」には「第4章 連体詞型字音接頭辞について」「第5章 「本法律案」の「本」、「当委員会」の「当」——直示と照応の両用法を持つ連体詞型字音接頭辞——」「第6章 「同病院」「同事務所」の「同」——照応用法を持つ連体詞型字音接頭辞——」「第7章 「某大学」「某メーカー」の「某」——不定機能を持つ連体詞型字音接頭辞——」「第8章 「全国民」の「全」、「総人口」の「総」——「すべて」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第9章 「両手」「両チーム」の「両」——「二つの」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第10章 「各地域」の「各」、「毎日曜日」の「毎」——「それぞれ」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第11章 「現政権」の「現」、「今世紀」の「今」——「現在」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第12章 「前首相」の「前」、「旧ソ連」の「旧」、「昨年度」の「昨」、「先場所」の「先」——「過去」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第13章 「翌年度」の「翌」、「来シーズン」の「来」、「明十五日」の「明」、「後半生」の「後」——「未来」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第14章 「副社長」の「副」、「助監督」の「助」、「半導体」の「半」、「準決勝」の「準」、「准教授」の「准」、「亜熱帯」の「亜」——「不完全」を表す連体詞型字音接頭辞——」「第15章 「当該チーム」「当該列車」の「当該」——二字連体詞型字音接頭辞——」「第16章 その他の連体詞型字

音接頭辞」を収める。「終章 字音接辞のカテゴリー記述と今後の課題」を配した後、「後書き」「中国語要旨」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024 年 12 月 28 日発行 花鳥社刊 A5 判横組み 424 頁 定価 6,380 円 ISBN 978-4-909832-80-1)

譚新珂著『ビジネス日本語における謙讓表現』

本書は、ビジネス日本語文書マニュアル本や、池井戸潤作品などの経済小説、そしてビジネス日本語教科書における謙讓表現の使用実態・使用傾向・使用特徴などについて考察したものである。ビジネスの場における文書・会話の謙讓表現のありようを丁寧に分析している。謙讓語Ⅰ・Ⅱだけでなく、「～(さ)せていただく」の使用傾向の分析や日中謙讓表現の対照研究も行っている。

本書は全 10 章からなる。「第一章 現代日本語における敬語とビジネス日本語」「第二章 ビジネス日本語文書における「謙讓表現」について」「第三章 ビジネス日本語会話における「謙讓表現」について」「第四章 ビジネス日本語文書における「～(さ)せていただく」について」「第五章 ビジネス日本語会話における「～(さ)せていただく」について」「第六章 ビジネス日本語文書における二重敬語「お伺いする」などについて」「第七章 日中謙讓表現についての対照研究」「第八章 ビジネス日本語教科書における謙讓表現について」「第九章 ビジネス日本語における「お(ご)…する」「お(ご)…申し上げる」「お(ご)…いたす」について」「第十章 終章 結論とこれからの課題」。末尾に「参考文献」と「謝辞」を付す。

本書は國學院大學博士論文出版助成金の交付を受けて刊行された。(竹村明日香)

(2025 年 1 月 23 日発行 郵研社刊 A5 判横組み 222 頁 定価 4,400 円 ISBN 978-4-907126-73-5)

丸山岳彦編『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の文法・音声』

コーパスは、言葉について調査したり多角的に考えたりするための強力なツールである。本書では、コーパスという道具の使い方を実習形式で体得しながら、日本語の研究方法について入門レベルから発展レベルまでを体験することができる。特に「文法・音声」をテーマに取り上げており、ら抜き言葉の分析手法や、コロケーションから「盗む」と「奪う」の差異を炙り出す方法、フィラーの分布のありよう、「けれど」の発音のバリエーションなど、具体例に即しながらコーパスの利用方法を学ぶことができる。各章では「導入」から「例題」、「演習」(及び「コラム」)へと段階を踏んで学ぶことができるよう設計されている。検索画面や表・グラフを多数掲載しており、初学者にも理解しやすい工夫が凝らされている。

本書は全 7 章と付録 2 本からなる。「第 1 章 コーパスでとらえる日本語の文法・音声(丸山岳彦)」「第 2 章 ら抜き言葉(佐野真一郎)」「第 3 章 コロケーション(茂木俊伸)」「第 4 章 文法形式のバリエーション(丸山岳彦)」「第 5 章 話し言葉の非流暢性(渡辺

美知子)」「第6章 発音のバリエーション(小磯花絵)」「第7章 話し言葉の経年変化(丸山岳彦)」「付録1 日本語コーパスの開発史と現状(丸山岳彦)」「付録2 リレーショナルデータベース概説(丸山岳彦・小磯花絵)」。末尾に「索引」を付す。(竹村明日香)

(2025年3月1日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 192頁 定価3,520円 ISBN 978-4-254-51653-1)